

(様式1)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	高知県	番号	39
-------	-----	----	----

推進地区名	協力校名	児童生徒数
安芸市	安芸第一小学校	297

○ 実践研究の内容

1. 推進地域における取組

(1) 学力向上推進計画の施策

◆平成28年度全国学力・学習状況調査結果等説明会

全国学力・学習状況調査の結果から見られる課題や改善方策について共有するとともに、実践発表や講演等を通して、各学校の学校経営計画に基づく組織的・協働的な学力向上の取組を促進させることを目的として開催している。（参加対象：県内の公立小・中・義務教育学校長及び県立中学校長等）

◆高知県学力定着状況調査の実施

本県の学力課題である小学校中学年の二極化、中1ギャップによる学力の低下に対応するために、小学校第4・5学年及び中学校第1・2学年の児童生徒の学力の定着状況を把握し、学習指導の充実や指導方法の改善に生かすとともに、各学校及び各教育委員会の学力向上検証改善サイクルを確立することを目的として実施している。

小学校第4学年では、国語・算数、小学校第5学年では、国語・算数・理科、中学校第1・2学年では、国語・社会・数学・理科・外国語（英語）の調査を実施し、調査内容は基礎的・基本的な知識・技能及び思考力・判断力・表現力等をみる問題を含むものとしている。

◆「学校経営計画」による組織的な取組の強化

平成28年3月に策定した「第2期教育振興基本計画」の取組として、チーム学校の構築を位置付け、学校の組織マネジメント力の向上を目指している。具体的には、各校において、教育活動における3年後の目標（目指すべき姿）とこれを達成するための具体的方策等を明確にした「学校経営計画」を策定し、さらなる学校経営力の向上の取組を推進している。

この中期的な目標設定、それに基づく短期的な取組の計画・実践・検証・改善するPDCAサイクルを充実させることにより、各学校の組織的な取組を一層強化し、学力向上対策をより実効性のあるものにしていく。

県教育委員会では、退職校長を学校経営アドバイザーとして配置し、各市町村教育委員会と連携しながら、学校とともに本年度の「学校経営計画」の検証を行うとともに、その検証が次年度の計画づくりに生かされ、計画が着実に実施されるよう、年間を通してその進捗状況を確認しながら必要な支援を行っている。

(2) 推進地区及び協力校に対しての指導・助言の状況

◆学力向上推進協議会の設置

推進地区の教育委員会担当者、推進地区の社会教育関係者や保護者等、協力校の学校長及び研究主任等を構成員とし、推進地区の児童生徒の学力を向上させるための取組や方策等について協議を行い、推進地区の学力向上対策の充実を図った。（年間3回実施）

2. 推進地区における取組

<取組の3本柱>

安芸市教育委員会の取組	協力校への働きかけ・支援
<p>①授業改善</p> <p>ア 統一性のある授業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「安芸市版授業スタンダード」の提示 ・問題解決の過程が可視化された板書づくり ・児童が自らの学びを振り返ることのできるノートづくり <p>イ 児童生徒が意欲的に取り組む工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主体的に取り組む姿勢を引き出す課題提示 ・学ぶ価値を味わわせる授業展開 <p>ウ 思考力の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ・思考対象の焦点化 ・数学的な表現を用いて、事象を簡潔・明瞭・的確に表したり、目的に応じて柔軟に表したりする力を育成するための授業展開 <p>エ 学びの定着</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業と家庭学習のサイクル化 ・授業での学びを生活や他教科等の学習に活用する場の設定 ・学習を振り返り、よりよく問題を解決する態度を育てる授業展開 	<ul style="list-style-type: none"> ・「安芸市版授業スタンダード」を基に、子供の意識に基づく授業構成の統一化を図る。 ・板書及びノートマニュアルを作成する。 ・児童主体の学習活動の構築を目指す。（価値ある「問い」づくり） ・既習を基に、言葉や数、式、図などを用いて、なぜそうなるのか、根拠を明確にしながらか解決していく演繹的な考え方の育成を目指す。 ・自らの考えをもう一度振り返り考察したり、説明を洗練し合ったりする学び合いを目指す。 ・1単位時間及び単元を通して育んだ思考力を見取る評価問題の在り方を探る。 ・単元で学ぶ学習内容の価値や身に付ける力を意識した授業づくりを目指す。
<p>②連携教育による生活・学習習慣づくり</p> <p>ア 小小連携及び小中連携を充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学力調査の分析と取組 ・公開授業研究の実施 ・中学校区の連絡会の実施 ・校長会の充実（児童生徒の学力向上対策研修等の実施） <p>イ 家庭学習の定着</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小中連携による「家庭学習の手引き」の活用 ・家庭学習の定着と習慣化 ・家庭学習調査の分析と改善策の構築 	<ul style="list-style-type: none"> ・協力校の中学校区間において、授業づくりや学力調査結果分析の情報共有を図る。 ・協力校において公開校内研修会を複数回開催し、推進地区内の小・中学校への参加を呼びかける。 ・中学校校区で、家庭学習の内容や目標時間を示した手引書（「家庭学習のすすめ」）を作成し、児童生徒や保護者への周知を図る。
<p>③教職員の資質・指導力の向上</p> <p>ア 外部講師の活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公開授業や研究授業を実施する際に、指導主事、大学教授、県外講師等を招聘 <p>イ 先進地や先進校視察研修</p> <ul style="list-style-type: none"> ・視察研修から学んだ効果的な取組等は、推進地区内の小 <ul style="list-style-type: none"> ・中学校と情報共有を図り、各校の教育活動に生かす。 <p>ウ 授業実践交流</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小小連携、小中連携による研究授業 ・校内研での視点の共通化 	<ul style="list-style-type: none"> ・指導主事、大学教授、県外講師などを招聘し、具体的な指導方法や新学習指導要領の趣旨を踏まえた授業の在り方について学ぶ。 ・視察研修から学んだことをもとに、自校の研究実践及び個々の指導方法等を見直し、今後の改善と進展に生かす。 ・板書による実践交流を行う。

3. 協力校における取組

(1) 個に応じたきめ細かな指導の徹底

①個々の思考力が育つ学び合いを充実させる

ア 子供の意識に基づく授業構成の統一化

「解いてみたい」「説明したい」という児童主体の学習活動を展開し、児童が主体的に学習対象に関わることができるよう課題提示の工夫を大切にしたい。また、児童の学び合いを単なる伝え合いにしないために、考える基となる条件を共有させ、思考対象を絞り込むことに留意してきた。さらに、考えを交流し合った後で、もう一度自らの考えを振り返り考察したり、説明を洗練し合ったりする学び合いをつくることを目指してきた。

イ 板書・ノートの統一

板書・ノートマニュアルを作成し、学年が変わっても児童が安心して学べるよう形式を全校で統一した。教師にとっては授業構成を明確に持つことにつながり、児童にとっては、振り返って考える際に、分かりやすいノートになるようにした。

②評価問題による見取り

児童の実態と指導内容に即した評価問題を作成し、日々の授業や単元の指導の中で思考力がどのように身に付いてきたかを見取り、個に応じたきめ細かな指導の徹底を目指した。

(2) 連携教育による生活・学習習慣づくり

①小中連携の推進・充実

平成28年度の全国学力・学習状況調査の分析結果及び改善方策について、小・中学校で意見交換を行った。算数・数学のB問題の記述式問題について、根拠を明確にして筋道立てて説明する力が弱いことや、問題文に示された事象や数量関係を的確につかみ、与えられた条件に合った説明をする力が弱いことが共通確認できた。

②家庭学習の充実

中学校区で、家庭学習の内容や目標時間の目安を示した手引書（「家庭学習のすすめ」）を作成し、児童生徒や保護者への周知を図った。

(3) 教職員の資質・指導力の向上

①外部講師の積極的な活用

夏季休業中に行った各学年の教材分析及び学習指導案検討会において、指導主事を招き、校内研修会の充実を図った。また、県外講師も年間6回招聘し、公開授業を通して具体的な指導をいただくとともに、新学習指導要領の趣旨を踏まえた授業の在り方について学んだ。

②先進校等の視察研修の実施

自校の研究実践及び個々の指導方法等を見直し、今後の改善と進展に生かすため、先進校等を視察した。先進校等の実践からは、日頃の授業の中で、思考力や表現力を育てる教材や問いかけの工夫が見られた。また、子供同士が学び合いの中で主体的に関わり合う姿も見られ、今後の授業づくりに参考になった。

③板書による実践交流

日々の授業実践において統一した板書形式の定着を目指し、算数科の単元で1枚は板書の写真を撮り、職員室に掲示していった。また、教員が互いの板書を「見える化」することで、教員同士の指導技術の高まり合いにつながるようにした。

○ 実践研究の成果

1. 協力校における取組の成果

(1) 場面や条件を捉え筋道立てて説明する力が付いてきた

年度当初に各クラスの児童を学力の定着状況により3層（A:十分満足、B:概ね満足、C:不十分）に分け、各層から1名ずつ検証児童を抽出し記述内容の変容を追跡した。特に6年生は、10月に算数B問題の再調査を行い、その記述内容の変容から思考力の高まりを見取った。

(2) 児童の学習意欲が向上し、学習課題に主体的に関わろうとする姿勢が育ってきた

算数アンケートの結果から、5・6年生の変容を見ると、全項目ともに向上している。特に、昨年度において伸びが見られず課題であった「自分の考えを伝える」ことについて大きく意識が変わってきた。

(3) 「付けたい力」を焦点化した授業が定着した

評価問題の作成を通して、1単位時間や単元のゴールの姿が明確になり、指導と評価の一体化を意識した授業づくりが進んだ。また、学習指導案の改善（A3用紙の表裏1枚）を行うことで、全教員が単元で学ぶ学習内容の価値や子供たちに身に付ける力は何か、また、そのための手立てをどのように行うか、ということをより意識し始めた。

これらのことを日々の授業で常に意識することで、「付けたい力」を焦点化した授業が全校に定着してきた。

2. 実践研究全体の成果

(1) 推進地域における高知県学力定着状況調査結果（H29.1月実施 小学校対象児童：第4・5学年）

算数・数学においては計算力の向上が見られ、基礎的・基本的な知識や技能の定着が図られてきている。また、根拠を明らかにして表現する力についても一定の伸びが見られた。しかし、獲得した知識や技能を、日常生活の場面に当てはめて課題の解決方法を考えることや、知識や技能を活用して、問題を解決する力、また、論理的に表現する力については、依然として課題が残っている。

(2) 安芸市版学力調査結果（H29.1月実施 小学校対象児童：第1・2・3・6学年）

算数における記述問題の無回答率については、「割合を使って説明する問題」が6.8%と最も高かったが、その他の問題は全て1%台であった。無回答は、正答率25%以下の児童が多く、問題場面を把握する力や身に付けた知識・技能を活用できる力が十分に身に付いていないと考えられる。

これらの課題解決に向けて、児童一人一人に学びへの興味・関心を持たせるとともに、学びへの粘り強さを身に付け、学びの自覚化を図れるよう指導方法の改善や質の高い授業づくりを進めていくことが重要である。また、各学校の学校経営計画に基づく取組をより強化、加速化させるとともに、組織的に進められるよう一層の支援を行っていくことも重要である。

3. 取組の成果の普及

- ・協力校において公開校内研修会を複数回開催し、推進地区内の小・中学校及び県内の算数科を研究する指定校への参加を呼びかけた。
- ・推進地区内の校長会において、各学校の効果的な取組の情報共有を図った。

○ 今後の課題

(1) 高知県学力定着状況調査の活用

各学校や市町村教育委員会において、本調査結果を分析して、課題の焦点化と課題解決のための対策の具体化を図るなど、本調査を効果的に活用し、子どもたちの学力向上をより確かなものにしていく。

県教育委員会としては、市町村教育委員会との連携を一層強化するとともに、保護者や県民の理解や協力を得ながら、本県の子どもたちが将来に夢を抱き、志を育み、社会を生き抜く力を身に付けることができるよう、学力向上の取り組みをさらに充実させていく。

(2) 「学校経営計画」による組織的な取組の強化

全教職員が日々の活動の中で目的意識を共有し、組織として一体的な取組を進めていくとともに、中間検証や年度末検証などを通して、各校におけるPDCAサイクルの機能を充実させていく。

(3) 「主体的・対話的で深い学び」のある授業実現を目指す

深い学びが目指す授業改善の視点として、以下のことが考えられる。

- *三つの柱の資質・能力の分析
- *問題解決の過程の質的見直し
- *内容の質的変革への指導の充実

これらの視点を基に、子供の真の学びの成果と向き合い、問題解決の質的転換を図りながら、一人一人の子供に確かな学びを保障し、授業の質の向上を目指していく。

(様式2)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【推進地区】

都道府県名	高知県	番号	39
-------	-----	----	----

推進地区名	安芸市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

全国学力・学習状況調査等の状況から、本市においては、小学校間及び小中学校間における学力定着の格差，児童生徒の学力の二極化，組織的に思考力や表現力を伸ばす授業づくりが十分にできていないことなどの課題が明らかとなっている。

そこで本市では、児童生徒の「確かな学力」の確立を目指し、以下の点に重点をおいて取り組み、児童生徒の学力向上及び教員の授業力向上を目指す。

(1) 個に応じたきめ細かな指導の徹底

- ・基礎的・基本的な知識や技能を活用して自ら考え、判断し、様々な問題に対応し解決する力を育む指導
- ・児童生徒の自主性を引き出す課題提示の工夫

(2) 保幼小中高を見通した生活・学習習慣づくりの確立

- ・保育所（園）・幼稚園と小学校，小学校と中学校，中学校と高等学校の引き継ぎと，一人一人の教育的ニーズに対応した適切な指導及び必要な支援の確立

(3) 教職員の資質・指導力の向上

- ・課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習やそのための指導方法等の充実
- ・授業研究会の充実

2. 研究課題への取組状況

本年度は、協力校と研究を進めながら、推進地区（小学校9校・中学校2校）に働きかけ、学力向上対策を具体化し、課題となっている二極化（各調査で正答率の低い児童生徒の正答率の底上げ）の改善を目指し、推進地区全体として、以下のことを中心に実践研究の推進を図った。

<取組の3本柱>

安芸市教育委員会の取組	協力校への働きかけ・支援
①授業改善 ア 統一性のある授業 ・「安芸市版授業スタンダード」の提示 ・問題解決の過程が可視化された板書づくり ・児童が自らの学びを振り返ることのできるノートづくり	・「安芸市版授業スタンダード」を基に、子供の意識に基づく授業構成の統一化を図る。 ・板書及びノートマニュアルを作成する。

<p>イ 児童生徒が意欲的に取り組む工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主体的に取り組む姿勢を引き出す課題提示 ・学ぶ価値を味わわせる授業展開 <p>ウ 思考力の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ・思考対象の焦点化 ・数学的な表現を用いて、事象を簡潔・明瞭・的確に表したり、目的に応じて柔軟に表したりする力を育成するための授業展開 <p>エ 学びの定着</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業と家庭学習のサイクル化 ・授業での学びを生活や他教科等の学習に活用する場の設定 ・学習を振り返り、よりよく問題を解決する態度を育てる授業展開 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童主体の学習活動の構築を目指す。（価値ある「問い」づくり） ・既習を基に、言葉や数、式、図などを用いて、なぜそうなるのか根拠を明確にしながらか解決していく演繹的な考え方の育成を目指す。 ・自らの考えをもう一度振り返り考察したり、説明を洗練し合ったりする学び合いを目指す。 ・1 単位時間及び単元を通して育んだ思考力を見取る評価問題の在り方を探る。 ・単元で学ぶ学習内容の価値や身に付ける力を意識した授業づくりを目指す。
<p>②連携教育による生活・学習習慣づくり</p> <p>ア 小小連携及び小中連携を充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学力調査の分析と取組 ・公開授業研究の実施 ・中学校区の連絡会の実施 ・校長会の充実（児童生徒の学力向上対策研修等の実施） <p>イ 家庭学習の定着</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小中連携による「家庭学習の手引き」の活用 ・家庭学習の定着と習慣化 ・家庭学習調査の分析と改善策の構築 	<ul style="list-style-type: none"> ・協力校の中学校区間において、授業づくりや学力調査結果分析の情報共有を図る。 ・協力校において公開校内研修会を複数回開催し、推進地区内の小・中学校への参加を呼びかける。 ・中学校区で、家庭学習の内容や目標時間を示した「家庭学習のすすめ」という手引書を作成し、児童生徒や保護者への周知を図る。
<p>③教職員の資質・指導力の向上</p> <p>ア 外部講師の活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公開授業や研究授業を実施する際に、指導主事、大学教授、県外講師等を招聘する。 <p>イ 先進地や先進校視察研修</p> <ul style="list-style-type: none"> ・視察研修から学んだ効果的な取組等は、推進地区内の小中学校と情報共有を図り、各校の教育活動に生かす。 <p>ウ 授業実践交流</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小小連携、小中連携による研究授業 ・校内研での視点の共通化 	<ul style="list-style-type: none"> ・夏季休業中の教材分析及び学習指導案検討会において、指導主事からの指導・助言をもとに、指導方法の工夫・改善を行う。 ・県外講師を年間6回招聘し、公開授業を通して具体的なご示唆をいただくとともに、新学習指導要領の趣旨を踏まえた授業の在り方について学ぶ。 ・視察研修してきたことをもとに、自校の研究実践及び個々の指導方法等を見直し、今後の改善と進展に生かす。 ・教員同士の指導技術の高まり合いにつながるよう、算数科の単元で1枚は板書の写真を撮り、職員室に掲示する。

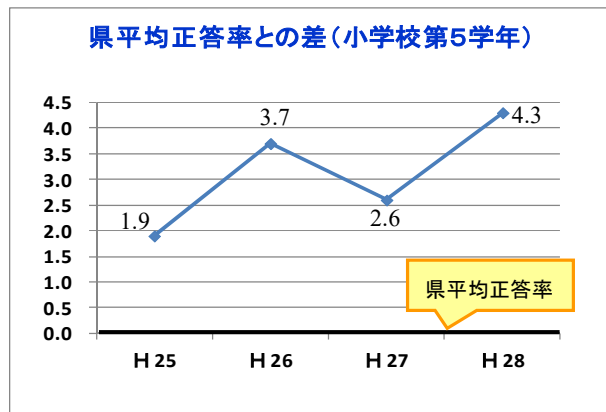
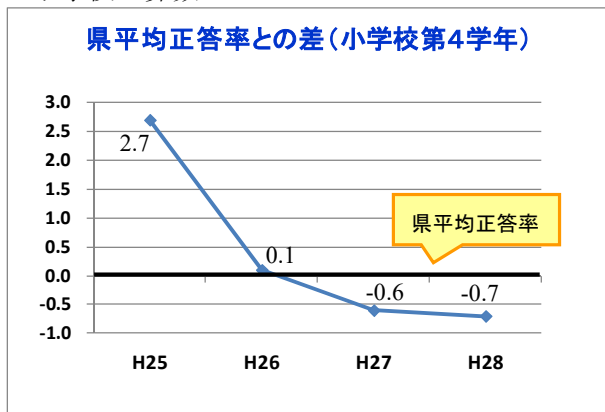
3. 実践研究の成果の把握・検証

(1) 学力調査結果

■高知県学力定着状況調査結果

本調査は、毎年度、小学校第4・5学年及び中学校第1・2学年を対象に実施している。平成25年度からの小学校及び中学校における算数・数学の県平均との差は、下のグラフのとおりである。

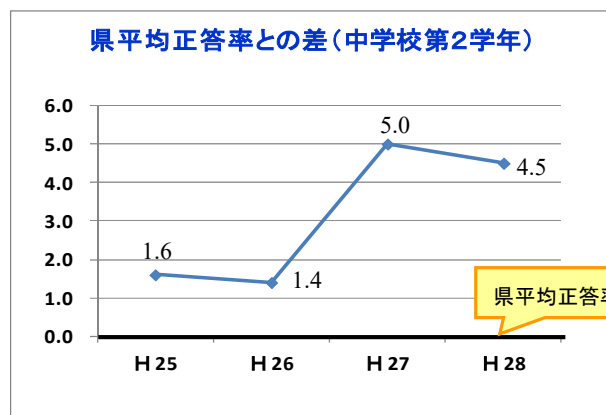
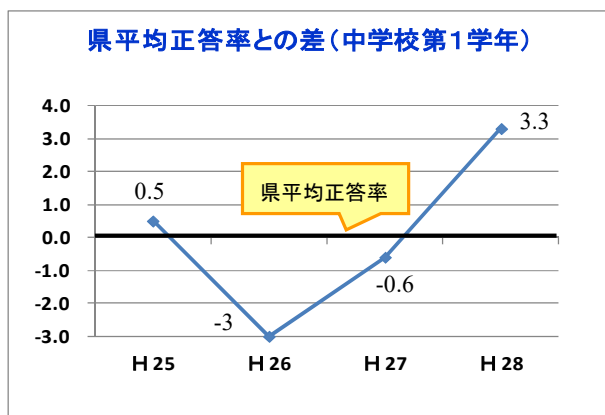
<小学校：算数>



第4学年は、平成25年度の結果は県平均を2.7ポイント上回っていたものの、平成27年度以降、県平均を下回る状況が続いている。

第5学年は、県平均を上回っている状況が続いている。特に、本年度は、県平均より4.3ポイント上回っており、平成25年度から比べると、2.4ポイントの上昇である。

<中学校：数学>



第1学年は、平成26年度の結果では県平均を3.0ポイント下回ったが、平成27年度から県平均に近づき、平成28年度には3.3ポイント上回った。

第2学年は、平成25年から県平均を上回る結果を出しており、平成27年度からは5.0ポイント上回り、平成26年度以前と比べると3ポイント以上の上昇である。

◇平成27年度調査における無回答率10%以上問題について

第4学年：算数 ※特に無回答率が高かった2問を示している。

正答率	問題の概要	無回答率
36.3%	図と式で表された数量の関係を読み取り、考え方を記述できる。	22.6%
6.5%	示された情報から、掲示板からはみ出す台紙の長さや台紙を重ね合わせる部分の数を基に、台紙を重ね合わせる部分の長さの求め方を記述できる。	44.4%

第5学年：算数 ※特に無回答率が高かった2問を示している。

正答率	問題の概要	無回答率
59.7%	平行四辺形のかき方を，合同な三角形のかき方を基に記述できる。	15.3%
68.5%	直方体の体積を求めることができる。	15.3%
47.6%	示された情報を基に，お風呂にお湯がたまる時間と高さの関係を捉えて，お湯がたまる時間の予想が正しい理由を記述できる。	23.4%

◇平成28年度調査における無回答率10%以上問題について

第4学年：算数 ※特に無回答率が高かった2問を示している。

正答率	問題の概要	無回答率
4%	示された情報から，方眼紙を半分に折って切って広げたときにできる図形が正方形となる理由を記述できる。	21%
10%	概数を用いた見積もりの結果により，50分間行動することができる理由を記述できる。	17%

第5学年：算数 ※特に無回答率が高かった2問を示している。

正答率	問題の概要	無回答率
35%	四角形の四つの角の大きさの和が360°になることを，三角形の三つの角の大きさの和が180°であることを基に記述できる。	10%
11%	示された情報を基に，1グループ当たりの発表時間を求める方法を記述できる。	18%

平成27年度は，無回答率10%以上の問題が，第4学年においては8問であったのが，平成28年度には，2問となっている。第5学年においても，平成27年度は3問あったものが2問となっており，無回答率減少の改善が見られる。このことから問題解決への意欲は向上しているといえる。しかし，問題を解決するために見通しをもち，筋道立てて考え，その考え方や解決方法を説明することなどには，依然として課題がある。

■安芸市版学力調査結果

安芸市版学力調査は，4月に第4・5学年，1月に第1・2・3学年及び第6学年に実施している。下の表は，本年度の第5学年及び第6学年に焦点をあて，同一児童における学力層の変容を示している。

<学力層割合(%)>

A：75以上，B：50以上～75未満，C：25以上～75未満，D：0以上～25未満

		A層	B層	C層	D層
H28年度第5学年	算数	23.5	19.6	29.4	27.5
H27年度第4学年	算数	18.9	22.6	35.8	22.6

		A層	B層	C層	D層
H28年度第6学年	算数	37	28.3	19.6	15.2
H27年度第5学年	算数	22.9	25	31.3	20.8

平成28年度第5学年の児童を前年度と比較すると，A層が4.6ポイント増加し，C層が6.4ポイント減少している。学力の上位層が増えているものの，D層の引き上げには至っていない。平成28年度第6学年の児童を前年度と比較すると，上位層が増加し，下位層が減少している。特に，D層が5.6ポイント減少とA層の14.1%の増加が顕著である。

(2) 家庭学習調査アンケート結果

家庭学習調査アンケートの結果から、平成27年度から平成28年度にかけて、肯定的評価の改善が見られなかった項目は次のとおりである。

<小学校>

家庭学習調査アンケート	肯定的評価	
	H27. 3 学期	H28. 3 学期
決まった時間に計画立てて取り組んでいる。	80.3%	76.5%
復習を行っている。	58.7%	58.5%
予習を行っている。	50.1%	48.7%
土日に学習を行っている。	67.4%	64.0%

<中学校>

家庭学習調査アンケート	肯定的評価	
	H27. 3 学期	H28. 3 学期
決まった時間に計画立てて取り組んでいる。	68.2%	62.5%
復習を行っている。	55.5%	53.6%
予習を行っている。	40.1%	34.6%
土日に学習を行っている。	73.9%	70.7%

特に、小・中学校ともに課題が見られるのは、「決まった時間に計画立てて取り組んでいる」の項目である。また、「予習を行っている」の項目においては、肯定的評価が50%以下の結果となっている。

4. 今後の課題

(1) 問題解決学習の質的転換

各学力調査結果から、学力定着に課題を抱える児童を十分に引き上げることができていないことが明らかとなった。そこで、1単位時間または1単元の中での児童の学びの成果を丁寧に見取り、個に応じたきめ細やかな指導の徹底を行うとともに、資質・能力の育成に向けた授業づくりを目指していく。

(2) 教員の資質・指導力の向上

協力校を中心に積極的に公開授業を実施したり、校長会において確かな学力の定着についての方策等を協議したりしてきた。しかし、推進地区全体の教員の授業レベルの向上には、結び付いていない。今後は、小小連携及び小中連携を強化させるとともに、各校の授業研究会を個人の授業分析に終わらせるのではなく、参会者一人一人のカリキュラムマネジメントの推進に役立てていくようにする。

(3) 家庭学習の質の向上

本市では、学期ごとに家庭学習強化週間を設定し、児童とともに保護者への家庭学習の意識化を図っている。

家庭学習調査アンケートの結果から、計画的に取り組むことや予習型の家庭学習には十分に組み立てていないことが分かる。この課題を改善するために、自ら課題を見つけ、主体的に解決していく児童の育成を目指し、授業中の学習と家庭学習をつなげる学びができるよう、家庭学習の工夫・改善に取り組んでいく。

(様式3)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	高知県	番号	39
-------	-----	----	----

協力校名	高知県安芸市立安芸第一小学校
------	----------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

全国学力・学習状況調査が始まった平成19年度は、算数科の平均正答率は全国平均値を大きく下回っていた。そこで基礎的・基本的な学習内容の定着を中心に取組を進めてきた結果、上昇傾向が見られているものの、改善の度合いは停滞している。

また、平均正答率の上昇傾向が見られだした平成24年度以降についても、B問題の記述形式の正答率は、全国を上回ることができず大きな課題となっている。特に、問題を理解し正答も分かっているが、説明不足により正答に至らない児童が多く、根拠を明確にし筋道立てた説明ができる力を付ける必要がある。

さらに、昨年度3年生以上の児童に実施した算数アンケートからは、「自分の考えを伝えることができる」の項目については上昇傾向が見られていない。特に、学力に課題がある児童の多くが否定的な回答であり、学習への見通しを立てることができていないと思われる。

日々の実践の中で、課題提示を工夫し、本時のねらいに向けて児童が思考できるよう、思考対象を絞り込む授業づくりが求められる。

2. 協力校としての取組状況

本校では、推進地区である安芸市が掲げる「確かな学力」の確立の柱のうち、「個に応じたきめ細かな指導の徹底」「保幼小中高を見通した生活・学習習慣づくりの確立」「教職員の資質・指導力の向上」に焦点を当て、以下の取組を進めてきた。

(1) 個に応じたきめ細かな指導の徹底

① 個々の思考力が育つ学び合いを充実させる

ア 子供の意識に基づく授業構成の統一化

児童の思考力を育てることを考えたとき、子供自身に疑問が生じ、学習対象に主体的に関わろうとする動機付けが重要である。そして、このことを基に「解いてみたい」「説明したい」という児童主体の学習活動を展開したいと考えた。また、児童の学び合いを単なる伝え合いにしないために、考える基となる条件を共有させ、思考対象を絞り込むことに留意してきた。さらに、考えを交流し合った後で、もう一度自らの考えを振り返り考察したり、説明を洗練し合ったりする学び合いをつくることを目指してきた。

イ 板書・ノートの統一

板書・ノートマニュアルを作成し、学年が変わっても児童が安心して学べるよう形式

を全校で統一した。教師にとっては授業構成を明確に持つことにつながり、児童にとっては、振り返って考える際に分かりやすいノートになるようにした。

②評価問題による見取り

児童の実態と指導内容に即した評価問題を作成し、この単元で育まなければいけない「数学的な考え方」がどの程度身に付いているか、また、考え方や表現がどのように変わってきたか、つまづいているところはどこなのか、などを分析・把握するようにした。そして、ここで見取ったことを次の単元の学習に生かすとともに、授業改善につなげ、個に応じたきめ細かな指導の徹底を目指した。

(2) 連携教育による生活・学習習慣づくり

①小中の連携の推進・充実

平成28年度の全国学力・学習状況調査の分析結果及び改善方策について、小中学校で意見交換を行った。算数・数学のB問題の記述式問題について、根拠を明確にして筋道立てて説明する力が弱いことや、問題文に示された事象や数量関係を的確につかみ、与えられた条件に合った説明をする力が弱いことなどの共通確認をするとともに、改善策を協議した。

②家庭学習の充実

中学校区で、家庭学習の内容や目標時間の目安を示した「家庭学習のすすめ」という手引書を作成し、児童生徒や保護者への周知を図っていった。また、家庭学習が次の日の学習に結びついたり、今日の学習を深めるものになったりするよう指導の工夫を重ねてきた。

(3) 教職員の資質・指導力の向上

①外部講師の積極的な活用

夏季休業中に行った各学年の教材分析及び学習指導案検討会において、指導主事を招き、校内研修会の充実を図った。また、県外講師も年間6回招聘し、公開授業を通して具体的な指導をいただくとともに、新学習指導要領の趣旨を踏まえた授業の在り方について学んだ。

②先進校等の視察研修の実施

自校の研究実践及び個々の指導方法等を見直し、今後の改善と進展に生かすため、先進校等を視察した。先進校の実践では、日頃の授業の中で、思考力や表現力を育てる教材や問いかけの工夫が見られた。また、子供同士が学び合いの中で主体的に関わり合う姿も見られ、今後の授業づくりの参考になった。

③板書による実践交流

日々の授業実践において統一した板書形式の定着を目指し、算数科の単元で1枚は板書の写真を撮り、職員室に掲示していった。また、教員が互いの板書を「見える化」することで、教員同士の指導技術の高まり合いにつながるようにした。

3. 取組の成果の把握・検証

(1) 場面や条件を捉え筋道立てて説明する力が付いてきた

年度当初に各クラスの児童を学力の定着状況により3層(A:十分満足, B:概ね満足, C:不十分)に分け、各層から1名ずつ検証児童を抽出し記述内容の変容を追跡した。特に6年生は、10月に算数B問題の再調査を行い、その記述内容の変容から思考力の高まりを見取った。その結果、A児は、貸出冊数の増え方が大きいことを具体的な数値を用いて記述できるようになった。B児は、根拠となる1目盛の数値を取り上げ説明できた。C児は、今回も誤答であったが、数や言葉を捉えて考え、粘り強く書こうとする姿が見られてきた。

【平成 28 年度全国学力・学習状況調査 B 問題 4】の再調査での抽出検証児童の記述変容】

	4 月	10 月
A 児	A 小学校は、800 冊から 1200 冊だけど B 小学校は、800 冊から約 1100 冊までだから増え方は A 小学校の方が大きいです。	A 小学校は 5 月の冊数は 800 冊で 6 月には 1200 冊です。1200-800=400 になります。B 小学校の 5 月は 800 冊です。6 月は約 1100 冊です。1100-800=300 になります。このことから、差が大きい方が答えが大きくなるので、400 冊と 300 冊では A 小学校の方が増え方が大きいです。
B 児	無解答	A 小学校の 1 つの目盛が 100 だけど、B 小学校は 1 つの目盛が 10 だと思うので、B 小学校は 800~1100 まで上がったけど実際は 300 上がっていて、A 小学校は 800 から 1200 まで上がっていて、400 上がっているので A 小学校が多い。
C 児	無解答	B 小学校の増え方が大きいと言えるのは、700 と 800 の間が大きいから、数を数えたらいいと思います。

(2) 児童の学習意欲が向上し、学習課題に主体的に関わろうとする姿勢が育ってきた

算数アンケートの結果から、特に研究に係る次の 4 項目について、5・6 年生の変容を見ると、全項目ともに向上している。特に、昨年度において伸びが見られず課題であった「自分の考えを伝える」ことについて大きく意識が変わってきた。

算数アンケート ※肯定的評価の割合 (%) を表示	5 年生		6 年生	
	H27. 5	H28. 10	H27. 5	H28. 10
・算数の授業で新しい問題に出合ったとき、「解いてみよう」と思う。	79	96	86	93
・算数の授業で自分の考えをクラスの人に伝えることができている。	47	82	69	84
・算数で分からない問題が出たときは、前に勉強したことを使って解こうとする。	68	98	84	92
・算数の授業で学習したことを普段の生活に使おうとしている。	82	92	80	84

(3) 「付けたい力」を焦点化した授業が定着した

評価問題の作成を通して、1 単位時間や単元のゴールの姿が明確になり、指導と評価の一体化を意識した授業づくりが進んだ。また、学習指導案の改善 (A 3 用紙の表裏 1 枚) を行うことで、全教員が単元で学ぶ学習内容の価値や子供たちに身に付ける力は何か、またそのための手立てをどのように行うか、ということをもより意識し始めた。これらのことを日々の授業で常に意識することで、「付けたい力」を焦点化した授業が全校に定着してきた。

4. 今後の課題

- * 学力の二極化傾向の改善
- * 根拠を明らかにし筋道立てて説明する力の確実な定着
- * 問題解決学習の質的転換
- * 家庭学習の工夫・改善

これらの課題を改善するために、個に応じた指導の徹底と、「聴き手を育てる」ことを意識した授業づくりを行い、学力の底上げを目指していく。また、評価問題の質の向上を図りながら、子供の真の学びの成果と向き合い、一人一人の子供に確かな学びを保障していくとともに問題解決学習の更なる質的転換を目指していく。さらには、将来にわたって主体的に学ぶ姿勢を育むため、中学校と連携し合い児童生徒の意欲を喚起するような家庭学習の工夫・改善に取り組んでいく。